

平成26年11月27日

「この人に聞く」成熟社会と建築

東京大学名誉教授

内藤 廣（ないとう・ひろし）氏

プロフィール 1950年横浜市生まれ。1976年早稲田大学大学院修士課程修了後、フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所(スペイン)、菊竹清訓建築設計事務所を経て、1981年(株)内藤廣建築設計事務所設立。2001年より東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻にて教鞭をとられ、教授、副学長を経て、2011年退官。現在、東京大学名誉教授・総長室顧問。日本建築学会賞(1993)、吉田五十八賞(1993)、村野藤吾賞(2000)、公共建築賞・特別賞(2010)を受賞。最近では、2014年に九州大学椎木講堂が竣工、2015年の春には、静岡県草薙総合運動場体育館、安曇野市庁舎が竣工予定。



(前文)

被災地復興から都市再開まで幅広く活動されている、建築家内藤廣氏に「成熟」をキーワードに、今後の建築、建築家のあり方などについて伺った。

■縮退していく社会

私は2001年から2011年まで東京大学で教壇に立っていました。私の役割は建築と都市工学と土木をつなぐ、もしくは風穴だけでも空けることでした。大学で教えた学生たちが社会で活躍し始めるのは20年後くらいでしょう。その頃には、世の中の様相も多少違ってくると期待しています。

私は大学を退官してからは、一建築家として建築に専念するつもりでしたが、そうなる前に3・11が起きました。震災後は、被災地の復興に関わることになり、これまで様々な復興支援の委員会に加わり、現在も陸前高田市の学校や国

営の復興祈念公園の検討などに取り組んでいます。

三陸は震災前から人口減少に悩んでいました。これは全国で起きていることで、こうした縮退は誰もが分かっている。日本全体の傾向として、都市はコンパクトにならざるを得ず縮退していくとしても、そうならないための理屈を誰も考えていない。そこで、私たちが今考えなければいけないのは、どうしたらそこまで縮退させずにすむかというロジックであることに思い当たりました。残念ながら縮退は避けられない。国全体の縮退もありますし、東京以外の都市は大変だろうと思います。その時に生き延びる方法をみんなで考えましょうということです。縮退を単に受け入れるのではなく、いかに生きるかを戦略化しなければならないと思いました。縮退、成熟、ストックといったディフェンシブな考え方では足りないのです。

我々の文化は、まとまりかけては壊され、ある時点で成熟しないようにバイアスがかけられる。自然災害で被害が出て、その後には新しい技術が生まれ、様々なことができるようになる。何か起きた時にそれを克服していく中に、新しいビジョン、新しいライフスタイルを生んできた。縮退、コンパクトにしていくにしても、思ったように単純にはいきません。我が国が縮退という一つの結論めいたものに向かっていくことはあり得ない。常に何か起きて、常に動的に先を読んでいかないと、この問題は解けません。むしろ、我々自身の思考が縮退することが一番の危機で、我々は常に外からの天変地異だとか技術革新だとかに身構える、あるいはそれをちゃんと受けとめるだけの思考力と強さを、我々の文化は根底に持たないといけない。

■成熟しないための方法

ここ10年ほど、渋谷の駅を中心とした都市再生特区の委員会の座長をやっています。当初、あまりにみんなプログラムだけでやっているの、これはまずいと思いました。大手設計事務所を中心に、あとは大手土木コンサルタントと組んで、そこそこのものができ上がる。渋谷はそれでいいのか。成熟させ落ちつかせる方法もありますが、渋谷はむしろ無法地帯に近い方が面白い。そこで、各街区ごとにデザイナー・アーキテクトに関わってもらうことを提案し、隈研吾さん、妹島和世さん、手塚貴晴さん、小嶋一浩さん、古谷誠章さんなどと大手設計事務所の組み合わせを進めるようにしました。

ある種の予定調和の中にはまっていこうとするものに対し、新しいバイアスをかけて変えていく。プロジェクトを静的ではなく、動的に捉えるのです。時代は常に変わっていきますので、いつも動的な要素の中で都市や建築を考えていく。生命として都市、建築を見る視点がないと固い方向に陥ってしまう。そ

ここにいる人間が生き生きとしていないと、いくら立派な街ができてもしようがない。人間が生き生きとするために多少整えた方がよければ整えればいいし、整えると街に元気がなくなるのならやらないという自由度を持たせた方がいい。これからの都市や建築の新しい概念は、やはり人間中心で考えてみることに尽きます。

私個人の建築家の仕事としては、静岡の県立体育館（静岡県草薙総合運動場）に取り組んでいて、この体育館は、これまでの日本建築で一番難しい建物だという認識でいます。設計技術として難易度が最高に難しく、施工技術としても一番難しいのではないかと。

ひとりの建築家としては、いつも新しいこと、誰もやっていないことをしたいと考えています。これは、私の中で作品的なものが閉じていく回路をいつも開いて壊していきたいからです。様々な挑戦をしていると、未知のことが起きますから、なかなか成熟していかない。技術的に新しいことに挑戦していると、いつも自分の気持ちが身構えているというか、開いている感じがするのです。

この体育館では、全く新しい、誰も見たことのない空間を新しい技術でつくることを目指しました。設計でも施工でも日本一難しいことに挑戦していると思っています。難しいことをやりつつ、木で包まれたような温かい空間が実現しています。「君はここに居ていいよ」と思える空間になったと思います。3・11以降、被災地に立つと「お前たち人間は、ここに居てはいけない」と自然から言われているような気がしていました。被災地だけでなく、都市に住む我々も含めて、居ていいと言われている場所、空間が意外とないのではないかと。だからこそ、そうではない場所をつくりたいと思っています。新しい技術を使い、新しい未来を切り開く、それでも人間的な空間を生み出し得るのだということを示す役割が建築家には課せられているような気がしています。

■人として、建築家として

建築家として被災地に臨むと、どうしても人として向き合うことが求められます。人として何ができるか。その道具立ての一つに建築、都市計画、土木があるだけで、まず人間として向き合わなければいけない。

一方で、建築家として関われるのだろうか、建築家として生きることと、人として生きることが乖離している印象をずっと持っています。もしかしたら建築家という役割がもう終わりかけている、役に立たなくなりつつあるのではないかなという気さえしています。建築家は今社会からどういうふうに見られているか、建築界全体で真剣に考えなければいけない。

ただ、建築家とは何かと考えると、とりあえず技術のことを知っている。それから、経済的なことも法律のことも多少知っている。そういう身の回りにあることを広範に知っている。そういう技能を持っていると考えると、役立て方はたくさんあるのではないか、そのあり方によって建築活動も変わってくるのではないか。建築を計画する人だけが建築家だとは思わない。人の暮らしの横にいて、それがよくなるように技術と経済と法律をもって奉仕するのが建築家であって、そのあり方は様々でいいのではないか。

我々の身の回りに起こる大きな変化を想像し、まずそれを人として受け止め、その上で建築家として何ができるかが問われているのだと思っています。